

## 経済思想史におけるケインズの位置<sup>(1)</sup>

(1) この論文は、*Modern Quarterly*, Winter 1950—51 に発表した論説「これの邦訳は水田洋・本井義雄訳『古典政治経済学と資本主義』、ミネルヴァ書房、一九五九年に所収を、かなり多く修正し書き直したものである。

### 1

今日の、ケインズ以後のマクロ経済学の文献には、ケインズの理論体系を、ケインズが主に攻撃の対象としたいわゆる「古典派の」体系と比較する論説が多い。元来、このような論説の主目的は、ケインズの体系と「古典派の」体系とを十分に正確な（たいていは数学的な）表現をもって定式化し、ケインズによってなされた本質的に新しい貢献を正確に確定しうるようにすることにあつた。ごく最近では、その主目的は、ケインズ体系の一般の刺激のもとに構築されたさまざまなモデルと、「古典派的」アプローチの現代の復興者たちによって構築されたさまざまなモデルとを、比較し対照させることに移ってきている。

これらの論説における基本的な議論は、その当初から、むしろ形式的な問題をめぐってなされる傾向があり、近年この傾向は強まってきている。そうした論説は「ケインズと『古典学派』」等々というような表題にもかかわらず、その大部分は、歴史的なものというよりもむしろ論理的なものであり、それらは、経済思想史家が「経済思想史におけるケインズの位置」について述べるばあいに通常念頭に置いている問題領域には、不思議なほどほとんど照明を与

えていない。この問題領域に照明を与えるためには、**真実の「古典派」経済学者を含む時代にまで溯つて比較対照を試みる**ことが重要である。この論文の意図するところは、こうしたタイプの比較対照のうち、将来の経済思想史家が現在われわれの生きている時期をふり返ってみたとき、おそらく適切かつ重要だと考えられる若干のものを予測してやることである。

### 2

ケインズとその他の経済思想の諸学派との関係についての評価という問題の全体は、『一般理論』の出発点をなしている「古典派」経済学の新しい——当時としてはやや驚嘆すべき——定義によってあいまいにされている。ケインズは、『古典派経済学者』<sup>(2)</sup> というのは、マルクスが、リカードやジェームズ・ミルおよび彼らの先行者たちを包括させるために発明した名称であつて、それは、いわばリカードの経済学において頂点に達した理論の建設者たちのためのものであつた<sup>(3)</sup>と書いている。もしわれわれがマルクスに対して正当な判断を下そうとするのであれば、もちろん、われわれは、この叙述が十分に正確なものでないことを認めなくてはならない。すなわち、マルクスは注意深く、古典派を、イギリスではベティからリカードまで、フランスではボアギューベールからシモンデーイまでのあいだとしていたのである<sup>(4)</sup>。またその叙述は、完全なものでもない。すなわちマルクスは、古典学派の歴史的境界を規定しただけでなく、古典学派をそれに続く諸学派から区別する本質的な特徴と彼が信じたものも描き出しているのである<sup>(5)</sup>。しかしながら、ケインズは、このさいは、マルクスを公平に評価するということには無関心であつたのであつて、ただ、「古典派」のレッテル——これは、現在ではマルクスの時代にそれにつきまといつてきたよりももっと著しい否認的陰影を帯びるにいたつているが——、この「古典派」のレッテルを、もつとずっと長期にわたる一連の経済学者に付与することにのみ関心をもつていたのである。ケインズは続いて次のように言っている、「私は、おそらく語法違反

solecism に陥っているであろうが、『古典学派』のなかに、リカードの追随者たち、すなわち、リカードの経済理論を採用し完成した人々、(たとえば) J・S・ミル、マーシャル、エッジワースおよびピグー教授を含むような人を、入れることを習慣としてきた」と。

(2) *General Theory*, p. 3, footnote [塩野谷九十九訳『雇傭・利子及び貨幣の一般理論』、東洋経済新報社、第三版、一九五五年、三十四ページの注] 本書前出、五三〔原〕ページを参照せよ。

(3) *Critique of Political Economy*, p. 56. [マルクス『経済学批判』、武田隆夫・大内力他訳、岩波文庫版、五七ページ]

(4) 本書後出、一八一〔原〕ページを参照せよ。

この「語法違反」が、天才的手腕を示すものであったことに疑いはない。ケインズの基本的意図を所与のものとするれば、彼の先行者たちに汚名を着せ、彼が自分の本質的に新しい貢献と考えたものをきわ立たせるのに、「古典派」という言葉以上に恰好の言葉は、おそらく発見されえなかつたであろう。それは、「セーの法則」——これはケインズが考えたように「生産費の全体は必然的にその総額において、直接また間接に、生産物の購入に費やされねばならない」という考えを意味する——のケインズによる否認に対して、また彼の先行者たちの多くによって、この法則が明白にであれ暗黙にであれ、承認されたことに対して、ただちに注目を集めたのである。リカードとピグーとは——奇妙な組合せだと考えられたであろうが——、両者とも、それぞれの流儀で「セーの法則」の本質的な正しさを信じていたことのゆえに、等しく反動(といってもそれ相当のものとして善意からのものであるが)として烙印を押されたのである。

(5) *General Theory*, p. 18. [塩野谷九十九訳、二二—二三ページ]

ケインズの「語法違反」は、リカードの時代からわれわれの時代にいたるまでの経済思想の流れにおける「セーの

法則」の継続性を強調し当時としてはやや珍しいものであったという点で、示唆にとむものであったとするのであれば、それは、また、マルクスのいう意味での「古典派」経済学と、その後に出てきた諸体系とを分離させる非常に重要な断絶を包み隠すという点で、反啓蒙的なものでもあったということ、また、ただちに付け加えておかねばならない。この断絶は、経済思想史におけるケインズ自身の位置を評価する上でおそらく重要性をもつと思われるから、それについて多少述べておかねばならない。そして、このほあい最も有効な出発点は、私の考えでは、マルクスの次のような叙述——すなわち、古典学派は、「現象のみを」扱う「俗流」経済学とは反対に、「ブルジョア社会における眞の生産諸関係を考察した」という叙述——である。(181)

(6) *Capital*, Vol. I, p. 81, footnote. [『資本論』、D版第一巻、八七ページ脚注、W版第三巻、一〇八一—一〇九ページ脚注。岩波文庫版(1)、一五九ページの注]

ここで、マルクスが強調している古典派経済学の特徴は、本書でもしばしばふれてきたものである。ごく大ざっぱに言えば、古典派経済学者は、次のように信じていた、すなわち、もし市場の諸現象を正しく理解すべきだとすれば、研究者は、これらの現象の表面の下にもぐって、生産者としての地位にある人々のあいだの諸関係——分析の究極においてそれが彼らの市場関係を決定しているということが出来るもの——を洞察することからはじめねばならない。と。諸商品が市場で相互に交換され価値を得るという事実は、要するに、これらの商品の生産者が彼らの個々別々の労働を諸商品に対象化することによって実際に相互のために働いているという事実の反映である、と信じていた。さらに、決してこれだけで全部ではなかつた。つまり、生産の領域における種々な社会・経済的諸階級のあいだの諸関係——諸商品の存在そのもののうちに潜在的に含まれている、より基礎的な「生産諸関係」の上に、いわば添加されている諸関係——が、後者〔生産諸関係〕の市場現象に及ぼす影響を、ある一定の非常に重要な仕方、変更させるのだと信じていたのである。古典派経済学者は実際いつもこうした複雑な意味での「生産諸関係」をもつてはじめていた